

(19)日本国特許庁(J P)

(12) 公開特許公報(A)

(11)特許出願公開番号

特開平6-111838

(43)公開日 平成6年(1994)4月22日

(51)Int.Cl. ⁵	識別記号	片内整理番号	F I	技術表示箇所
H 0 1 M 8/02		R 8821-4K		
C 0 1 B 3/38				
H 0 1 M 8/06		R		

審査請求 未請求 請求項の数5(全 15 頁)

(21)出願番号	特願平4-261415	(71)出願人	000003078 株式会社東芝 神奈川県川崎市幸区堀川町72番地
(22)出願日	平成4年(1992)9月30日	(72)発明者	古屋 富明 神奈川県川崎市幸区小向東芝町1番地 株 式会社東芝総合研究所内
		(72)発明者	白鳥 昌之 神奈川県川崎市幸区小向東芝町1番地 株 式会社東芝総合研究所内
		(72)発明者	清水 征三郎 神奈川県川崎市幸区小向東芝町1番地 株 式会社東芝総合研究所内
		(74)代理人	弁理士 則近 憲佑

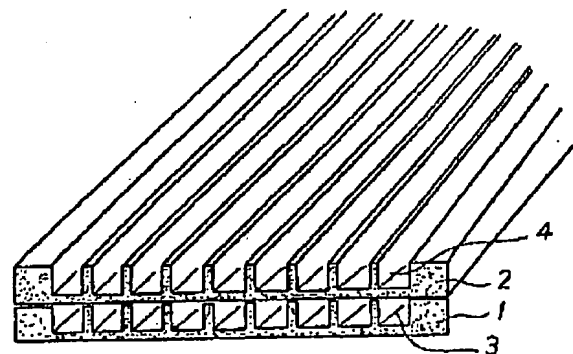
最終頁に続く

(54)【発明の名称】 改質器、改質システム、及び燃料電池システム

(57)【要約】

【目的】 本発明は効率良く、燃料を水素ガスに変換し、かつ小型化が可能な改質器及び改質システムを提供することを目的とする。

【構成】 本発明の改質器は溝を有する複数の平板を積層して流体流路を形成しその一方の平板の溝の表面が改質触媒にて被覆され、他方の平板上の溝の表面が燃焼触媒にて被覆されており、触媒燃焼にて生じた熱で改質反応に必要な熱を供給するものである。



(2)

特開平6-111838

1

【特許請求の範囲】

【請求項1】 溝を有する複数の平板を積層して流体通路を形成し、その隣接する一方の平板の溝の表面に改質触媒が形成され、他方の平板の溝の表面に燃焼触媒が形成されていることを特徴とする改質器。

【請求項2】 燃料を触媒反応させて発熱する触媒反応層と、燃料改質を行う改質反応層とを積層した構造を有する改質器において、前記燃料の触媒反応層及び改質反応層への導入、及び触媒反応後の生成物及び改質反応後生成物の外部への排出を内部マニホールドにて行うことを特徴とする改質器。

【請求項3】 炭化水素基を有する化合物からなる燃料を水素に変換させる触媒を担持した多孔質体を備えた改質器において、触媒が多孔質体中に濃度傾斜を持って分布していることを特徴とする改質器。

【請求項4】 燃料を収納する燃料タンクと、燃料を改質反応させ水素を発生させる改質器と、燃料タンクから改質器への燃料を送る配管とを備えた改質器において、前記配管の少なくとも一部が形状記憶合金よりなることを特徴とする改質システム。

【請求項5】 平板が導電体より成る請求項1記載の改質器と、酸化剤極と燃料極と向電極間に挟持された電解質板とを積層したことを特徴とする燃料電池システム。

【発明の詳細な説明】

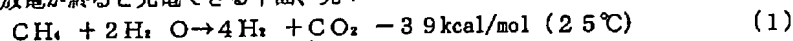
【0001】

【産業上の利用分野】本発明は、燃料電池システム、及び燃料電池に水素を供給するために炭化水素基を有する化合物からなる燃料を水素に変換する改質器及び改質システムに関し、特に小型化に適した構造の燃料電池システム、改質器及び改質システムに関する。

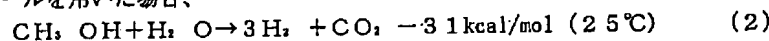
【0002】

【従来の技術】近年、ワープロ、パソコンをはじめとするOA機器や家庭用電化機器は、半導体技術の発達と共に小型化され、さらにポータブル化が要求されている。従来このような要求を満足するために、これらの機器の電源として、手軽な一次電池や二次電池が使用されている。しかし、一次電池や二次電池は、機能上使用時間に制限があり、このような電池を用いた機器では、当然使用時間が限定される。これらの電池を使用した場合、電池の放電が終った後、電池を交換して機器を動かすことはできるものの、従来の一次電池ではその重量に対して使用時間が短く、ポータブルな機器には不向きである。

また、二次電池では、放電が終ると充電できる半面、充*



となり、また、メタノールを用いた場合、



となり、上記(1)、(2)に例示されるように、いずれも吸熱反応である。上記反応を効率よく生起させるには、通常メタンの場合で800℃以上、比較的低温で反応するメタノールを用いた場合でも、少なくとも150

2

* 電のために外部電源を必要とし使用場所が限定されるのみならず、充電時間が必要となり、機器の運転が中断されるという欠点がある。こりように、各種小型機器を長時間作動させるには、従来の一次電池や二次電池では、対応が難しく、より長時間の作動に向けた電源が要求されている。

【0003】上記の問題点の一つの解決策として、従来の一次電池や二次電池の代わりに燃料電池システムを用いることが挙げられる。燃料電池システムは、現在大型の発電プラントとして実用化されている。燃料電池システムにおいては燃料と酸化剤を燃料電池本体に供給することにより発電するもので、酸化剤として空気を使用し、更に燃料のみを外部から供給することにより、連続して発電できるという利点を有している。そのため燃料電池システムの小型化ができれば、各種小型機器の作動に極めて有効である。

【0004】さて、上記燃料電池システムにおいては、通常、炭化水素基を含む化合物及び水からなる燃料を燃料電池本体とは別に設けた改質機構によって水素ガスに改質し、その水素ガスを燃料電池本体に送り発電を行っている。上述の如く燃料電池システムを小型化し、機器に搭載するための発電システムとするためには、燃料電池本体のみならず、改質機構も小型化、及び高効率化する必要がある。

【0005】図19は周辺機器を含めた従来の改質機構の概略図である。改質槽本体101の槽壁には断熱材102が設けられている。改質槽本体101内に設置されている反応管は外管103及び内管104で構成されており、反応管の内部には、燃料の改質反応を行う改質触媒105が充填されている。改質触媒の材料としては、セラミックスに担持させたニッケル等が用いられている。バーナー106は、改質触媒が十分な改質活性を維持する温度に加熱するために設置されている。燃料である炭化水素及び水の混合物は、燃料タンク108からポンプ109により熱交換器107に供給される。熱交換器107では、バーナー106の燃焼排気ガスが持つ熱を用い炭化水素基を含む化合物及び水からなる燃料を加熱して気化させる。気化された燃料は改質槽本体101中の反応管に送られ、反応管にて水素に改質された後、燃料電池本体に供給される。一方、炭化水素基を含む化合物と水との混合物を改質して水素ガスを得る反応は、例えばメタンを用いた場合、

(3)

特開平6-111838

3

ることを考えると、バーナーの火炎を用いた加熱では火炎、火傷等の災害の危険性が生じる。

【0006】また、周辺機器へ影響や、安全面を考慮すると反応槽本体101内の熱が外部に漏れないよう断熱材などを設ける必要がある。しかし分厚い断熱材を用いていたのでは、改質機構の小型化には不向きである。

【0007】また、従来の改質機構における反応管などの配管にステンレス製などのチューブが用いられているが、チューブ自体の体積を必要とするばかりでなく、長さ方向への熱膨張による歪みを吸収するためのスペースを設ける等の工夫をする必要がある。また、粒状の触媒を反応管に詰めて使用する場合、ある程度管径を太くせねばならず、これも小型化の妨げとなる。

【0008】

【発明が解決しようとする課題】以上述べた如く、改質機構の小型化を考慮した場合、従来の改質機構では、改質反応に関与する熱の供給のために、バーナー、反応槽、反応管などの設備を必要とし、それ自体体積を必要とすると共に、安全面の点からも小型化は困難である。

【0009】本発明は、上記課題を解決するためになされたもので、上述したようなバーナー、反応槽、反応管などの付帯設備を用いることなく、改質反応に必要な熱を改質触媒に供給することにより、効率良く燃料の改質反応を起こさせ、かつ小型化に適した改質機構及びそれを用いた燃料電池システムを得ることを目的とする。

【0010】

【課題を解決するための手段及び作用】本発明は、溝を有する複数の平板を積層して流体通路を形成し、その隣接する一方の平板上の溝の表面が改質触媒が形成され、他方の平板の溝の表面が燃焼触媒が形成されていることを特徴とする改質器である。

【0011】以下、図1及び図2を用いて本発明の改質器の基本構造を示す。本発明の改質器においては、溝を有する平板(図1中では平板1及び平板2で示す。)を少なくとも2枚以上積層することによって、平板1の溝を有する面と平板2の溝を有しない面により流体流路3を形成し、また、平板2の溝を有する面と平板1の溝を有しない面により流体流路4を形成する。

【0012】図2に本願発明の改質器の部分断面図を示す。図2に示される平板1及び平板2は各々図1に示される平板1及び平板2に相当するものである。隣接した平板のうちの一方の平板1に形成された溝の表面は改質触媒6が形成されている。また、平板1に隣接した平板2に形成された溝の表面には燃焼触媒5が形成されている。各々の改質触媒6を形成した平板1と燃焼触媒5を形成した平板2は交互に積層されている。

【0013】上記のような構成の改質器において、図2に示される改質触媒6を形成した平板1の溝を有する面と平板2の溝を有しない面により形成される流体流路3

4

料を供給し、改質反応によって水素を生成させる。また、燃焼触媒5を形成した平板2の溝を有する面と平板1の溝を有しない面により形成される流体流路4には、燃料と酸素含有気体を供給し、平板2の溝の表面にある燃焼触媒5によって触媒燃焼反応を起こさせる。なお、前記酸素含有気体は空気により代用してもよい。

【0014】ここで流体流路4において生起する触媒燃焼反応は、発熱反応であることが必要である。前記触媒燃焼反応により生じる熱は、平板1を介して平板1の溝を有する面に伝導され、平板1の溝の表面の改質触媒6において生じる前記改質反応に用いられる。すなわち、本願発明は、燃焼触媒を有する平板2と改質触媒を有する平板1とを積層させることにより、発熱反応である触媒燃焼反応と吸熱反応である改質反応とを隣り合った位置にて同時に生起させ、改質反応に必要な熱を触媒燃焼反応によって供給するものである。

【0015】それにより、バーナーによる火炎を用いることなく効率よく改質反応を生じさせることができ、またその構造は平板の積層体であるため、バーナーをはじめ反応槽、断熱材、反応管などの付帯設備が不要となり、小型の改質器を提供することができる。

【0016】また、改質反応を生起させる層と触媒反応を生起させる層と積層させる方法としては、本願発明の構成の他に、一枚の隔壁の一方の面を改質触媒層でコーティングして、他方の面を燃焼触媒層でコーティングしたエレメントを表裏交互に流路を形成して積層する方法、また、材料を押し出し成型することにより多数のハニカム状の流路を形成して隣接する流路に異なった触媒を担持させる方法が考えられるが、上記の構造での改質器の製造を考えた場合、本願発明の如く片面に一種の触媒を形成した平板を積層する方法に比して、各々の触媒層を形成する際の条件(焼成温度、焼成時間、焼成雰囲気など)を各触媒の形成部位毎に変えることが難しく、そのため、実質的に有効な触媒層が形成できない。本発明の改質器においては1枚の平板に対し一種の触媒を形成するため、触媒毎に最適な形成条件が製造が行えるため、実用的である。

【0017】一方、本発明に係る溝を有する平板の材質は、セラミックス、金属、シリコンなどの半導体、高分子樹脂板等、特に制限されないが、熱伝導率が高い物質が好ましい。

【0018】溝を有する平板は、上記の材質の平板を機械的に、切削加工、目的溝を凸状に加工して金型で加圧成型して製造する方法が挙げられる。また、化学的加工作業などによって溝を形成することも可能である。また、エッチング技術、リソグラフィ技術などの微細加工技術を用い、平板の材料表面に感光性レジストを塗布し、目的の溝のマスクを用いて露光、及びエッチングして溝を形成することもできる。改質触媒及び燃焼触媒として、公知の触媒を使用することができる。

には、炭化水素気を含む化合物と水の混合物からなる燃

(4)

特開平6-111838

5

【0019】改質触媒は、Pt、Ni、Cu、Zn、Al、Pd、Auなどを単体または合金として用いることができる。また、ZnO、FeO、Cr、Cr₂O₃、BeO、K₂O、WO₃なども用いることができる。また、Fe₂O₃-Cr₂O₃、OやCr₂O₃-Al₂O₃、やFe₂O₃-MoO₃などの多元触媒が挙げられる。

【0020】また、燃焼触媒としては、Pt、Au、Agなどの貴金属等を単体または合金として用いることができる。更にCu、CuO、Cu₂O、Ag₂O、Zn、Hg、Pd、PdCl₂、Co、OsO₄、Fe、FeO、MoO₃、Cr、V、V₂O₅、TiO₂、TeO₂、Se、SeO₂、P₂O₅、PbO、Pb、Sn、SnO、Ba、BaO、Ca、などが挙げられる。また、V₂O₅-K₂SO₄-ケイソウ土、ホブカライト(MnO₂、CuO、Co₂O₃、AgO)やAg₂O-Al₂O₃やCu₂O-SeO₂やV₂O₅-K₂SO₄-シリカゲルやFe₂O₃-Cr₂O₃などの多元触媒も挙げられる。

【0021】これらの触媒は、平板に形成した溝の表面に多孔質体を形成し、多孔質体に島状あるいは粒状に分散して担持させることが、反応面積が増え触媒の利用率が向上するため、好ましい。

【0022】多孔質体を平板の溝の表面に形成させるには、種々の方法がある。例えば、平板の溝の表面にアルミナからなる多孔質体を形成する場合、溝表面を金属アルミニウムでコーティングした後、金属アルミニウムを酸素雰囲気中で加熱して酸化するかまたは、酸化剤を作用させて酸化させ、アルミナからなる多孔質体を形成することができる。また、平板自体の材質を酸化処理してもよい。例えば、シリコンからなる基板に溝を形成した後、マスキングして平板の表面を酸化処理すると、溝の表面にSiO₂からなる多孔質体を形成することができる。

【0023】また多孔質体の材質は、上記のAl₂O₃、SiO₂の他に、さらにその他の方法で形成されるSiO₂-Al₂O₃、粘度鉱物、MgO、TiO₂、α-Al₂O₃、ケイソウ土、シリコンカーバイド、アラシウムなどが挙げられる。

【0024】また前記触媒は平板の溝の表面に種々の方法で形成させることができる。例えば、燃焼触媒または改質触媒をターゲットとし、溝を形成した平板にスパッタリングで上記触媒を形成する方法でもよい。スパッタリングにより触媒を形成することにより触媒を均一に平板の溝の表面に形成することができる。

【0025】この時スパッタリング時の条件として雰囲気ガスとして酸素あるいは水素をアルゴン等の不活性ガス中に0.3Vol%以上～3Vol%以下程度加えたものを用いることが好ましい。それにより不活性ガスのみの

とができる。

【0026】また、多孔質体を形成した平板の溝の表面に触媒を担持させるには、スパッタリングで金属触媒を多孔質層に照射したり、触媒金属塩水溶液、あるいはコロイドを多孔質層に含浸後、乾燥、焼成する方法が挙げられる。また、多孔質体の原料成分と触媒成分とを混合スラリーとして平板にコーティングした後、乾燥焼成する方法でもよい。

【0027】平板の溝の表面に形成した多孔質体に触媒を担持させる場合、図3に示される通り、触媒粒子の濃度を傾斜分布させてもよい。図3は触媒を担持した多孔体の部分断面図である。図3において触媒担持体12は平板の溝の表面に形成した多孔体を示し、11は触媒粒子を示す。触媒粒子の濃度は燃料の通路の側が最大となるよう形成することが好ましい。

【0028】上述の如くの触媒を傾斜濃度を有するように分布させた多孔体は、本願発明の如くの改質器だけでなく、一板の隔壁の一方の面に改質触媒を有し、他方の面を燃焼触媒を有するエレメントを表裏交互に流路を形成して積層するタイプの改質器にも用いることができる。

【0029】図4は改質器の構成を示す部分断面図である。図4に示されるように、触媒担持体12は多孔体であり、かつ一方の面は燃焼触媒粒子13が表面の方が高い濃度を持つように傾斜分布して担持されている。また別の面は改質触媒粒子14が同様に表面の方が高い濃度を有するよう傾斜分布して形成されている。改質器の構成としては上述の如くの触媒担持体が同様の触媒面が向き合い、かつ流体流路15、16となる空間を持つよう積層する。燃焼触媒粒子13の分布を有する部分と、改質触媒粒子14の分布を持つ部分の境界には、各々の流路に供給される燃料及び生成物が混合せず、かつ、熱の伝導を妨げない熱伝導性の分離体17を設けておくことが好ましい。また各触媒担持体12の表面または内部に燃料及び生成物の流路15を設けることができる。(図5)

また濃度傾斜を持つ担持体の内部に燃料及び生成物の通路16を設け該通路の径が傾斜変化を持つ担持体を積層して構成することもできる。(図6)

担持した触媒の濃度傾斜を持つ触媒担持体の成形方法には次の方法が挙げられる。ここで、AまたはBを触媒または担持材とする。

1) 溶浸法

【0030】多孔体Aの空隙に他のBを溶解、滲透させて埋める方法である。多孔体Aよりも融点の低いBを用いて、多孔体とのぬれがよければ毛細管現象で空隙に滲透する。AとBの圧粉体を組み合わせ、焼結接合を兼ねて溶浸することも可能である。また熱処理が必要である。Aの空隙の変化またはAとBとの混合比を変えて圧粉体の使用によりAまたはBの濃度傾斜ができた担持体

(5)

特開平6-111838

7

となる。

2) 粉末圧延法

【0031】粉末Aを圧延ロールで直接連続的に圧粉板にし、引き続き焼結して多孔質焼結板とし、さらに熱間圧延によって真密度の圧延板とする。この工程のいずれかで、粉末Bを供給し、さらに同じ工程を粉末Bの量を変えて繰り返すことによりAとBの濃度傾斜ができた担持体となる。

3) 容射成形法

【0032】AとBの容湯を窒素ガスで噴霧し、冷却コレクタとして丸棒を回転移動させながら容射堆積して成形する方法で、AとBの噴霧量を変えて繰り返し容射堆積して剥がせばAとBの濃度傾斜ができた担持体となる。

4) その他の方法

AとBとの混合比を変えた圧粉体の層を作り焼結鍛造法、熱間等方圧成形法、擬熱間等方圧成形法などでAとBの濃度傾斜ができた担持体となる。

【0033】上述の如くの触媒を傾斜濃度を有するように分布させた多孔体を用いた改質器は、燃料の浸透の多い多孔体の表面層にて最も活性に反応が生起し、また燃料の浸透の少ない多孔体の内部においても反応は生起し、かつ不完全な反応は起こり難い。したがって供給された燃料は、最大限に反応に用いられ、また燃料の不完全な反応に伴うカーボンや酸化炭素の発生による触媒汚染あるいは、触媒毒となる物質の生成を最小に抑えることができる。また、多孔体の内部でも反応が生起するため、改質反応と触媒燃焼部における熱交換において、熱損失が抑えられる。したがって改質器の効率が向上する。

【0034】さて一方、前述した図1に示される如くの改質触媒を形成した平板と燃焼触媒を形成した平板とを積層した構成の改質器においては、改質触媒6を形成した平板1の溝を有する面と平板2の溝を有しない面により形成される流体流路3には、炭化水素と水の混合物を供給し、燃焼触媒5を形成した平板2の溝を有する面と平板1の溝を有しない面により形成される流体流路4には、燃料と酸素の混合物を供給する必要がある。また、流体流路3下流には生成物である水素及び二酸化炭素及び一酸化炭素が生じ、また、流体流路4には二酸化炭素及び水などの生成物が生じるためこれらの生成物を別々に排出する必要がある。このような積層体の層間に異なった2種以上の流体を供給及び、排出する際には、内部マニホールドを用いることが好ましい。それにより、流体の供給管、排出管が簡素化される。図7は本発明の改質器の一部を示す斜視図である。図7において平板20は流体流路21を形成する溝を有しており、また溝の表面には、燃焼触媒（図示せず。）が形成されている。また、平板22も同様に流体流路23を形成する溝を有しており、また溝の表面には、改質触媒（図示せず。）

8

が形成されており、平板20と平板22は交互に積層されている。（下方の平板20及び平板22を以下、各々平板20a、20b…、平板22a、22b…とする。）平板20において流体流路21から矢印24の方向に流出してくる流体（この場合、水素ガス）は、流路と連結して平板に開いている孔25を出て行き、隣接する平板23の同一位置に設けられた孔26を経由し、さらに下方に積層された平板20と同構成の平板20aに設けられた孔25において平板20aにおける流体流路からの流体と合流する。以下平板25bにおいても同様に合流を繰り返し、各平板上の流体流路からの流体は積層構造物の最下部にて排出される。

【0035】一方、流体の供給については平板22を例にとり説明する。流体の供給は、排出の場合と逆に、平板22の流体流路23の上流に流体流路に連結して設けられている孔27から行われ、隣接した平板22に設けられた孔28を介してさらに上方に送られる。

【0036】このように、流体流路と連結している孔と連結していない孔とを各平板の両端の同位置に備えることによって、改質反応と燃焼反応の各々の系統に供給配管と排出配管とをそれぞれ1本ずつ接続するだけでよく、配管が簡素化される。

【0037】また、本願発明の如くの内部マニホールドを用いた場合、孔25及び孔26、孔27及び孔28の設ける位置によって流体流路21、23が平行または直交とすることができる。特に流体流路21及び23とを平行流とし、かつ触媒燃焼の燃料の供給方向と、改質燃料とを同方向に流すよう平板に設ける孔及び各々の燃料供給方向を調整することにより、平板上の温度の分布が均一化し、さらに効率よく改質反応が進むものである。

【0038】本願発明の如く、触媒燃焼による発熱反応を起こす層（触媒燃焼層）及び改質反応による吸熱反応を起こす層（改質層）を積層した改質器においては、改質器全体が改質層にて改質反応が効率よく起こるに足る目的温度まで上昇したならば、燃料を間欠的に供給するかあるいは調節して温度を一定に保つことが好ましい。それにより触媒燃焼層に供給される燃料のむだがなく、また、温度の上昇しすぎによる危険も防止できる。燃料タンクから改質器の触媒燃焼層または改質反応層へ燃料を送る方法としては、燃料タンクと改質器をつなぐパイプに設けたバルブ及び燃料供給量を調節するためのバルブ調節器を用い何らかの方法で制御し、必要量の燃料を供給する方法がある。特に微細加工技術によるマイクロポンプを用いると小型化が可能となる。

【0039】また、燃料タンクを均一加圧状態とし、燃料タンクと改質器をつなぐパイプの一部を形状記憶合金で形成し、温度変化により該合金製パイプを変形させ、燃料の供給量を調整することも可能である。以下具体的に説明する。

【0040】図8に形状記憶合金からなる配管を用いた

(6)

特開平6-111838

9

改質システムの一例を示す概念図を示す。燃料タンク41から本発明の改質器42へ燃料供給を行う配管の一部(図中43及び44)が形状記憶合金で形成されている。図において43は改質燃料供給用の形状記憶合金配管であり、44は触媒燃焼燃料供給用の形状記憶合金配管である。改質器42は触媒燃焼層と改質層とが積層されており、各層への燃料供給は内部マニホールドにより各々1カ所から行なえるようになっている。このような2つの改質器は、形状記憶合金配管43及び44を含んで積層されている。形状記憶合金配管43、44は改質器42の燃料供給孔に接続されている。触媒燃焼燃料供給用配管44は温度が低いと開いており温度が高くなると閉じるようになっている。

【0041】また、改質燃料供給用配管43は温度が低いと閉じており、温度が高くなると開くようになっている。形状記憶合金配管43及び44の開閉は具体的には配管がある一定の温度に達すると絞りこみ、折り畳み、潰れる等の形状の変化が生じ、配管を閉じ、その逆の形状変化が起こることにより配管が開く。形状記憶合金配管43及び44は改質器42に積層されることにより改質器42の温度の変化に対応し配管の開閉を行い供給する燃料の量を調節するものである。

【0042】運転開始直後は改質器42の温度は低いため、触媒燃焼燃料供給用配管44は、開き改質器42内の触媒燃焼層に燃料が供給される。該層にて触媒燃焼が生じ改質器42の温度が上昇し、改質燃料供給用配管43が開き、改質器42の改質層に燃料が供給される。また前記触媒層に過剰に燃料が供給され改質器42の温度が上昇しすぎると、配管44は閉じ燃料供給は減少する。以上のように配管43及び44は改質器42の温度の変化に応じ燃料の供給量を調節し、改質器の温度を及び改質量を一定に保つと共に、燃料の供給のむだを省く。

【0043】また、形状記憶合金を用いた燃料供給配管は、改質器と燃料電池とを組み合わせた燃料電池システムに適用した際に、燃料電池に供給された水素量に応じて、改質器への燃料供給量を調節する機能を持たせることも可能である。以下に具体的に説明する。

【0044】図9は形状記憶合金からなる燃料供給配管を適用した燃料電池システムを示す。図9において41は燃料タンク、42は改質器、45は燃料電池である。燃料タンクから改質器へ燃料を供給する配管の一部は形状記憶合金からなる配管46となっている。配管46の周囲はヒータ47が設置され、配管46を加熱できるようになっている。配管46はヒータ47が作動しないと管が開いた状態であり、また、ヒータ47が作動すると管が閉じた状態となるような配管を用いている。また改質器42で生じた水素は配管48により燃料電池に供給される。燃料電池45の水素供給孔には圧力センサが設けられている。圧力センサ49は燃料電池の水素供給量

10

に応じて、配管46の周囲にあるヒータ47を作動させるよう設定されている。このような燃料電池システムにおいて、例えば改質器42から燃料電池の容量よりも過剰に水素が供給された場合、水素供給孔の水素圧力が上がるため、圧力センサ49が作動し、ヒータ47が作動する。それに伴ない配管46が閉じ改質器への燃料の供給が停止される。また、水素の供給が少くなり、水素供給孔の水素圧力が下がった場合、ヒータ47の作動が止まり、配管46が開き、改質器42に燃料が供給される。

【0045】上記の燃料電池システムにおいては、圧力ヒータの作動圧、ヒータ47の温度設定は燃料電池システムの運転状況により適宜選定すればよい。また圧力センサのかわりに温度センサを用いてもよい。

【0046】このように形状記憶合金を配管に用いることにより、燃料調整用のバルブ調整用器材を使用することなく、小型軽量の改質システムまたは燃料電池システムが得られる。また、燃料のむだを省き効率的に運転させることができる。

【0047】一方本願発明の構造の改質器は、平板の積層体から構成されるため、燃料電池のスタック(少なくとも燃料極、酸化剤極、及び両電極に挟持された電解質板)と共に積層することができ、改質器と燃料電池が一体となった燃料電池システムを提供できる。それによりコンパクトな発電装置を得ることができる。

【0048】図10に本願発明の改質器と燃料電池スタックの積層体からなる燃料電池システムの概略図を示す。図10において30は、平板に燃焼触媒、または改質触媒を形成した平板を積層した本願発明の改質器である。また、31は電解質板、32は燃料極、33は酸化剤極である。燃料極32及び酸化剤極33にはそれぞれ水素ガス及び、酸化剤ガスの流路34、35が設けられている。

【0049】改質器30の改質触媒を有する流路には、メタノール等の炭化水素基を有する化合物及び水蒸気の混合物からなる燃料が供給される。生成物の水素ガスは別系統の流路を通して燃料電池の燃料極32に供給される。また、改質触媒を有する流路を燃料極に隣接して構成し該流路にて生ずる水素が直接隣接した燃料極の酸化剤ガス流路に供給されるよう構成すれば、配管が簡略化される。この場合、燃料極と改質触媒を形成した平板との間に水素ガス選択性透過膜37を設けておくと純粋な水素のみが燃料極に供給され好ましい。また、改質器30の燃焼触媒を有する流路には、燃料と燃焼用の空気として外部から空気を取り入れるかあるいは燃料電池の空気極33からの廃ガスまたはそれらを混合して供給する。該流路に供給する燃焼用の燃料としては外部から炭化水素類あるいは燃料極からの廃ガス(未反応の水素)を供給する。

【0050】本願発明の改質器は、燃焼触媒を形成した平板において、発熱反応が生じその熱が改質触媒を形成

(7)

特開平6-111838

11

した平板における吸熱反応に用いられる。また、燃料電池においては、発電時には熱が発生するが、起動時には作動温度まで加熱したり、発電時に適正な温度まで加熱するためにも利用できる。

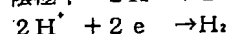
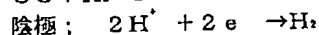
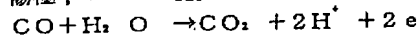
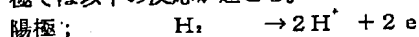
【0051】燃料電池と本願発明の改質器を積層することにより、コンパクト化を図れるのみならず、各々で発生する熱を相互に利用することが容易となり熱の利用効率を向上させることができる。

【0052】図10においては、燃料電池のスタックが一つの例について記載したが、さらに複数の燃料電池及び改質器を交互に積層してもよい。燃料電池スタックを複数個直列に積層したものと改質器を積層してもよい。

【0053】また、改質器を形成する平板を電気導電性を有する材料で形成し、燃料電池スタックと積層することにより、改質器の積層された平板を介して燃料電池のスタックが電気的に直列に接続される。そのため、改質器を介して積層された燃料電池のスタック間の配線が不要となり、全体の積層構造の両端にシステム全体の電力を取り出すことが可能となる。

【0054】本発明では、積層する燃料電池の種類を限定するものではなく、炭化水素を改質した燃料を用いる燃料電池であればよい。例えば、固体高分子電解質膜（例えば商品名Nafion Du Pont社製）、水素イオン伝導体（例えばヒドロニウムあるいはアンモニウムβアルミナもしくはβガリア、三酸化セリウムストロンチウムの焼結体）を電解質に用いた燃料電池、酸素イオン伝導体（例えば、安定化ジルコニア）を電解質に用いた燃料電池などが挙げられる。

【0055】また図10において、電気導電性を有する材料からなる平板を用いた改質器と燃料電池の積層体を形成する場合、改質器の改質触媒を有する流体流路を流体流路36とし、流体流路36と燃料電池燃料極の水素ガス流路34との間に、両面が触媒活性と電気伝導性を有する水素イオン（プロトン）伝導膜37を備えることにより、改質触媒層で改質された流体中から選択的に水素を燃料電池燃料極の流体中に移動させて燃料電池燃料極で反応させることが可能である。改質触媒を有する流体流路36では炭化水素基を含む化合物が改質されて水素、一酸化炭素、二酸化炭素が生成するが、流体中には未反応の炭化水素類や水も残留している。この流体と燃料電池燃料極の流体の間に両面が触媒活性と電気伝導性を有する水素イオン（プロトン）伝導膜37を設置すると、改質触媒を有する流路36に接する膜の表面を陽極とし、燃料電池燃料極の流路34に接する側の膜の表面を陰極として電位差を生じる。この時、膜の陽極と陰極では以下の反応が起こる。



12

【0056】この反応によって、改質触媒層の流路の流体中の水素と一酸化炭素の分圧が低下し、改質反応の進行が促進される。また、燃料電池燃料極の流路36に接する側の膜の表面では水素のみが生成して、高純度な水素が燃料電池燃料極で発電のために使用される。膜の両側の電位差は、電気的・構造的に積層されている燃料電池から生じる電力の一部を消費して生じさせるため、外部からの電力供給は不要である。また、改質器が電気導電性を有するため、燃料電池スタックとの電気的な積層が可能であり、電気配線が不要である。本発明によれば、改質反応と燃料電池の電極反応が促進されるため、炭化水素の利用効率向上と装置のコンパクト化が図れる。さらに、本発明においては燃料電池スタックの各々に電気的に並列にコンデンサーや2次電池を接続することによって、システムの起動時など燃料電池電極での発電が不十分の時でも外部への電力供給が可能である。また、コンデンサーや2次電池は改質器の流路から水素イオン伝導性膜を介して水素を燃料電池燃料極に供給する場合の起動時の電力源にもなり、システムの起動が容易になる。

【0057】

【実施例】以下実施例により本発明の改質器を説明する。

（実施例1）

【0058】0.1mm厚さのニッケル板に感光レジストを塗布し、0.15mm間隔で0.3mmピッチで露光現像後エッチングし、幅0.18mmで深さ0.6mmでピッチ0.3mmの溝を形成したニッケル製の平板を複数枚作成した。

【0059】得られた平板にマスキングした後、白金をターゲットとし、圧力 10^{-3} Torr、酸素1%を含有したアルゴン雰囲気中で10秒間スパッタし、平板の溝の表面に平均厚さ0.5μmの島状の燃焼触媒を形成した。同様の方法で燃焼触媒を形成した平板（以下平板2とする）を10枚作成した、他方上記の方法と同様な方法にてエッチングしたニッケル製の平板にマスキングした後、銅と亜鉛の合金をターゲットとし、圧力 10^{-3} Torr、水素1%のアルゴン雰囲気中で10秒間スパッタし、平板の溝の表面に平均厚さ0.5μmの島状の改質触媒を形成した。同様の方法で改質触媒を形成した平板（以下平板1とする。）を10枚作成した。上記方法で得られた平板1と平板2とを、図1に示されるように順次交互に積層し、外装をガラス綿、及びアルミニウム箔で巻き付け、改質器を得た。

【0060】次に、以上のようにして得られた改質器について、運転を行なった。溝の表面に燃焼触媒を有する流体流路4に、メタノールと空気を混合燃料を流したところ、流体流路4内の温度が200℃程度に上がったため、流体流路3にメタノールと水とを1:1に混合した燃料を流した。その結果メタノールと水が気化し、さ

50

(8)

特開平6-111838

13

らに水素が変換された。メタノールの水素への変換率は60%~70%であった。

(実施例2)

【0061】溝を形成した平板に、改質触媒及び燃焼触媒を形成する際のスパッタリング時のガス雰囲気、圧力 10^{-3} Torr、酸素1%を含有したアルゴン雰囲気である以外は、実施例1と同様な方法で改質器を得た。

【0062】得られた改質器について実際に運転を行った。溝の表面に燃焼触媒を有する流体流路4に、メタノールと空気との混合燃料を流したところ、実施例1の場合に比して5倍の体積の燃料を流した時点で流体流路4の温度が200℃程度に上がった。次に、流体流路3にメタノールと水とを1:1に混合した燃料を流した。その結果メタノールと水が気化し、さらに水素に変換された。メタノールの水素への変換率は15%~25%であった。

(実施例3)

【0063】本実施例においては、改質器に内部マニホールドを設け改質触媒を有する流体流路への燃料供給・生成物排出方向と、燃焼触媒を有する流体流路への燃料供給・生成物排出の方向とが直交した場合の実施例を示す。

【0064】まずシリコンウェーハ(100)面、500μm厚)を熱酸化することにより、表面にSiO₂を形成し、リソグラフィ技術を用いて所定のパターンを転写した後、フッ化水素酸でSiO₂の選択除去を行った。次に、エチレンジアミン系の水溶液を用いた異方性エッチングを行うことにより、ウェーハの表面に図11の如く台形状の溝52を形成した。この時、溝の深さは約100μmとし、ピッチは約1mmとした。溝の両端は各々の溝を通過した流体が混合するように深溝53、54を形成してあり、一方は下方からの流路との接続のために開放とし、他方は上部との接続のために上部のみを開放とした。また、本ウェーハを燃料ガス用及び加熱流体用に交互に積層した時の一方の流体の経路接続用に、開放した溝55を形成した。各エッチング工程終了後、ダイシングにより全体のシリコン基板51形状を図11の如くとした。

【0065】前記の如く流体経路を形成したシリコン基板51にスパッタ法等により、経路内に燃焼触媒層を形成した。また別途シリコン基板51と同様な方法で図12に示すような形状のシリコン基板56~60を製造した。シリコン基板56、58には燃焼触媒を形成し、シリコン基板57には改質触媒を形成した。図12の如く改質反応用基板57及び触媒燃焼用基板56が直交するように各ウェーハを直接接合法により接合し積層した。直接接合することにより、例えば基板56と57との接合により、基板56の表面に形成した溝は基板57の底面により各々1本の流路となる。

【0066】改質反応用基板57の上下が燃焼用基板

14

56及び58となる構造とすることにより、燃料ガスの改質部を均一に加熱することができる。また、積層構造の最下部及び最上部には各流体の配管用に燃料ガス入口62、改質後の水素含有ガス出口64及び加熱用ガス入口61、出口63を図14の如く形成した。

【0067】本発明に係わる改質器の断面図を図13に示した。前記の如く積層した基板を、シリコンをエッチングすることにより作製した固定治具65、66で改質装置内に固定した。固定治具には燃料ガス及び加熱流体用の微小な貫通孔を形成してあり、低融点ガラス等で配管と接続した。

【0068】また、燃料供給タンクから改質装置への経路には、微細加工技術により作製したマイクロポンプ72、73を設置した。このマイクロポンプはシリコンとパイレックスガラスを陽極接合により作製される。シリコンのエッチングにより流体の流路を形成し、またパイレックスガラスにはエッチングによりダイヤフラムを形成してあり、ダイヤフラムの上部にピエゾアクチュエータが取り付けられている。このアクチュエータに電圧を印加することにより、ダイヤフラムが上下することにより流体を所定量流すことが可能となる。

(実施例4) また、担持した触媒が傾斜濃度分布を有する多孔体を用いた改質器の実施例を示す。

【0069】酸化アルミニウム(融点2050℃)粉体33gを開口径1mmのホッパーにに入れて自然落下させ、ニッケル金属粉(融点1455℃)10gを開口径0.1mmのホッパーにに入れて秒速50mmで往復運転している2500℃に加熱したタングステン(融点3370℃)板の上に均一に落下させる。粉体の落下点の両サイドに2500℃に加熱したタングステン(融点3370℃)ロールを加重10kgから秒速100gで減圧しながら厚さ2mmのニッケル担持酸化アルミニウム圧延体を成形する。同様にしてニッケル金属粉のかわりに白金(融点1773℃)を用いて白金担持酸化アルミニウム圧延体を成形する。それら圧延体をタングステン板から剥し、銅(融点1083℃)の溶湯中にタングステン板から剥した圧延体の面を側面まで浸漬し溶浸した後取りだし、一對の両端の側面をそれぞれ切り落としその切り落とし面が交叉するように銅でぬれた面を重ね熱圧着し結着した。

【0070】この成形板をニッケル担持酸化アルミニウム圧延体面はニッケル担持酸化アルミニウム圧延体面に、白金担持酸化アルミニウム圧延体面は白金担持酸化アルミニウム圧延体面に切り口をそろえて6枚積層して改質器を組み立てた。

【0071】貫通路を持つ白金担持酸化アルミニウム多孔質圧延体の切り落とし面からメタノール蒸気と過剰の空気を2気圧で流動させ、一方貫通路を持つニッケル担持酸化アルミニウム多孔質圧延体の切り落とし面からメタノール蒸気と等モルの水蒸気を2気圧で流動させる。

(9)

特開平6-111838

15

そしてリホーマーの一部を150℃以上に上げてメタノールと酸素を着火したところ、100時間以上水素発生濃度の変化は見られなかった。

(実施例5)

【0072】本実施例においては、本願発明の改質器において、燃料タンクから改質器へ燃料供給する配管に形状記憶合金からなる配管を適用した場合の燃料電池システムについて説明する。

【0073】図14のように表裏面に半田鍍金した厚さ0.2mm、大きさ100×300mmの薄いニッケルにあらかじめ補給孔92、排気孔93、通気口94として径5mmの穴4つ開けた。さらに、表面をエッチングしてピッチ1mm、長さ70mm、幅0.5mm、深さ0.1mm細溝89、燃料補給溝90及び排気溝91として幅10mm、深さ0.1mmを作成した。改質用、燃焼用それぞれ3枚ずつ作成した。このように作成した基板表面の細溝部の凹凸及び各溝を除いた部分にカバーを付け燃焼用には酸化触媒を改質用には改質触媒をそれぞれスパッタで薄く付けた。これらを交互に積層し230℃でプレスし積層し改質器とした。上記の方法で得られた改質器を用い、図15のように燃料電池システムを作成した。

【0074】41は燃料タンク42は上記改質器、45は燃料電池である。配管系は均一に加圧できるようにした燃料タンク41から改質器42に燃料を供給する配管の一部に形状記憶合金配管46が用いられている。この形状記憶合金配管46にヒータ47が巻かれている。形状記憶合金配管46は常温では閉じており、ヒータ47を加熱することにより開く。形状記憶合金配管46は二股に分かれた配管80に繋がる。配管80の一方を燃焼燃料供給用形状記憶合金配管44に繋がり、燃料補給孔部に繋がっている。燃焼燃料供給用形状記憶合金配管44は、常温では開いており、温度が目的温度になると閉じる。燃焼燃料供給用形状記憶合金配管44と燃料補給孔92の間に空気供給配管81がある。配管80の地方に改質燃料供給用形状記憶合金配管43が繋がり改質の燃料補給孔92に繋がっている。改質燃料供給用形状記憶合金配管43は、常温では閉じており温度が高くなると開く。改質部で改質され生じた水素ガスは燃料電池本体45に供給させる。燃料電池には圧力センサ48が取り付けられ、改質ガスの圧力が目的圧力以上になるとヒータ47が切れ、燃料調整用形状記憶合金配管46が閉じる。圧力が下がるとヒータ47が入り、再び燃料調整用形状記憶合金配管46が開く。

【0075】積層された改質器42と配管の関係は燃焼燃料供給用形状記憶合金配管44と改質燃料供給用形状記憶合金配管43を中心にし積層された改質器42が2つ積層されており、改質器の温度変化により配管18及び19の形状が変化する。また、このようにした外側は断熱材82を巻き、熱効率を高める。

16

【0076】メチルアルコールと水をモル比で1:1に配合した燃料を作成した装置に取り付けた。運転始めに電気を供給しヒータ47を加熱し燃料供給形状記憶合金配管46を開け、燃料を供給する。加熱用と改質用に二股配管80で分けられ、常温で開いている燃焼燃料供給用形状記憶合金配管44を通り、空気供給配管81から空気を補給し、燃料と混ぜて燃焼部に送られ触媒により触媒燃焼し発熱した。

【0077】その熱により形状記憶合金が加熱され温度が120℃を越えた時点で閉じていた改質燃料供給用形状記憶合金配管43が開き改質部に燃料が供給された。140℃を越えると、燃焼燃料供給用形状記憶合金配管44が閉じ温度上昇が停止した。改質し発生した水素は燃料電池本体45に送られ発電が始った。改質された水素により水素の電池内の圧力が2.1kg/cm²を越えるとヒータ47が切れて燃料供給形状記憶合金配管46が閉じ燃料の供給が停止された。圧力が1.8kg/cm²以下になると、再びヒータ47が加熱され燃料供給用形状記憶合金配管15燃料が開き供給された。温度が120℃から140℃に、改質された水素圧力は2.1kg/cm²から1.8kg/cm²に保たれ連続的に燃料電池の運転ができた。

(実施例6)本実施例においては、本発明の改質器と燃料電池スタックとを積層した燃料電池システムについて説明する。

【0078】図16に本実施例の燃料電池システムにおける炭化水素燃料の改質部を形成する平板の平面図を示す。改質部は図16に示される円形の平板120、121、122から構成されている。図16は平板を上部より見た図である。平板120、121、122には各々流体の流路となる溝及び孔a~hが形成されている。平板120、121、122は各々アルミニウムよりなり厚み2mm、直径100mmである。平板120及び122の溝の表面には、改質触媒が形成されており、また平板121の溝の表面には燃焼触媒が形成されている。各々の平板への触媒の形成は以下に示す方法に行った。

【0079】まず平板120及び122は図16に示されるように溝及び孔を形成した後、溝の表面を苛性ソーダ水溶液に浸せきして表面のアルミニウムの一部を溶出させた後、過酸化水素水溶液で表面のアルミニウム層を酸化し、水洗、乾燥して多孔質のアルミナ層を形成させた。この多孔質アルミナ層を硝酸銅と硝酸亜鉛の水溶液に含浸して乾燥・焼成した後、水素気流中で還元処理して改質触媒を担持させた。また、平板121は上記平板120及び122と同様にして多孔質のアルミナ層を形成した後、同様な多孔質アルミナ層に硝酸パラジウム水溶液を含浸して乾燥・焼成して燃焼触媒を担持させた一方、図17には本実施例の燃料電池システムにおける燃料電池部の燃料極及び酸化剤極を構成する平板の平面

(10)

特開平6-111838

17

図を示す。

【0080】平板123は酸化剤極、平板124は燃料極である。平板123、124は平板120～122と同サイズ、同素材であり、図17の如くに溝及び孔a～hが形成されている。

【0081】一方、厚さ0.2mmのパーフルオロカーボンスルホン酸膜（商品名；Nafion）の両面に触媒担持カーボン粉末とポリテトラフルオロエチレン（PTFE：商品名；テフロン）とNafion溶液とを混練したものを金めっきニッケルスクリーンと共にホットプレスし、さらに、その上に多孔カーボン板を圧着した水素イオン伝導膜を用意した。膜の両面には異なる触媒が形成されており一方は白金／ルテニウムを用い、もう一方は白金であった。

【0082】また、燃料電池の電解質板として、厚さ0.2mmのパーフルオロカーボンスルホン酸膜（商品名；Nafion）の両面に白金触媒担持カーボン粉末とポリテトラフルオロエチレン（PTFE：商品名；テフロン）とNafion溶液とを混練したものを金めっきニッケルスクリーンと共にホットプレスし、さらに、その上に多孔カーボン板を圧着した電解質板を用意した。

【0083】上記平板120～平板124を上から平板123、平板124、平板120、平板121、平板122の順番でかつ、各々の平板に設けた孔a～eが各々1本の通路を形成するように積層し、平板123（酸化剤極）と平板124（燃料極）との間に前記電解質板を挟み込み、平板124と平板120の間に前記水素イオン伝導性膜を挟み1つのユニットを形成した。この際、水素イオン伝導性膜の白金／ルテニウム触媒が形成された面は、平板120と隣接させ、白金のみが形成された面は平板124と隣接させて積層した。このユニットを二段重ね、さらに上部と下部に配線を行い燃料電池システムを形成した。

【0084】図18に本実施例に係る燃料電池システムの概略図を示す。図中125は電解質板、126は水素イオン伝導性膜である。また各平板により形成した孔a～eより形成される通路における供給物質及び排気物の流れを矢印にて示した。

【0085】まず、孔gを通じて平板124（燃料極）の溝に水素を供給すると共に、平板121（燃焼触媒を形成した平板）の溝に孔fを通じて水素及び孔eを通じて空気を、平板122（改質触媒を形成した平板）の溝に孔dを通じてメタノールと水の混合物を供給した。また平板123（酸化剤極）にも孔eを通じて空気を供給した。

【0086】平板121（燃焼触媒を形成した平板）では常温から燃焼が開始して熱を発生した。それにより平板122で改質反応も開始した。平板122で生じた水

18

素は孔hを通じて平板120へ送られた。また平板124、平板123及び電解質板125からなる燃料電池部では温度上昇と共に発電を開始した。作動の温度が150℃に達したところで孔gによる平板124（燃料極）への水素の供給を停止し、平板121（改質触媒を形成した平板）への孔fから供給していた水素をメタノールに切り替えた。水素供給を全て停止した後も引き続き発電が起こった。

【0087】上記燃料システムの温度は121に供給するメタノール量を調整することにより150℃に保った。平板120（改質触媒を形成した平板）にて生じる二酸化炭素及び未反応の水素等を含む排気ガスは孔cを通じて外部へ排出された。平板124（燃料極）上から生じた未反応の水素は孔bを通じて外部へ排出された平板123（酸化剤極）にて生じた水蒸気は、孔aを通じて外部へ排出された。以上詳述した如く改質器と燃料電池を積層したコンパクトな燃料電池システムを得ることができた。

【0088】

【発明の効果】以上詳述した如く本願発明によれば、従来の改質器に用いられていたバーナ、反応槽、反応管等の設備を用いることなく、改質反応に必要な熱を供給でき、改質器を小型化でき、また、効率良く改質反応を起こさせることができる。また、本願発明の燃料電池システムは、改質器と一体化したことによりコンパクトな発電システムを提供できる。

【図面の簡単な説明】

【図1】 本願発明の改質器の構成図。

【図2】 本願発明の改質器の部分断面図。

【図3】 触媒を担持した部分断面図。

【図4】 本願発明の改質器の構成図。

【図5】 触媒担持体の断面図。

【図6】 触媒担持体の断面図。

【図7】 本発明の改質器の一部分を示す斜視図。

【図8】 形状記憶合金からなる配管を用いた改質システムの概略図。

【図9】 形状記憶合金からなる配管を用いた燃料電池システムの概略図。

【図10】 本願発明の改質器と燃料電池スタックを体積した燃料電池システムの概略図。

【図11】 シリコンウェーハの斜視図。

【図12】 実施例3に係る改質器の部分斜視図。

【図13】 実施例3に係る改質器の断面図。

【図14】 実施例5に係る平板の構成図。

【図15】 実施例5に係る燃料電池システムの概略図。

【図16】 実施例6に係る燃料電池システムの改質部を構成する平板の平面図。

【図17】 実施例7に係る燃料電池システムの燃料電池部を構成する平板の平面図。

水素ガス、一酸化炭素、二酸化炭素、未反応のメタノール

(11)

特開平6-111838

19

20

【図18】 実施例7に係る燃料電池システムの概略図。

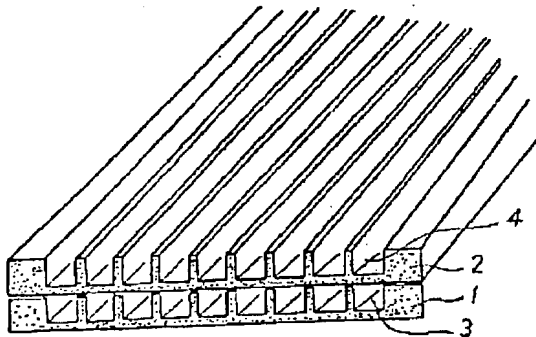
【図19】 従来の改質器の概略図。

【符号の説明】

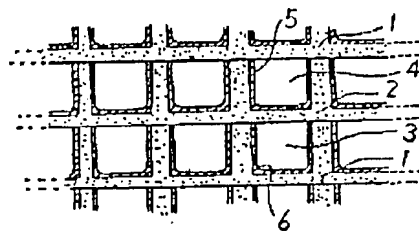
1, 2, 20, 22…平板 3, 4, 15, 16, 2
1, 23, 36…流体流路
5…燃焼触媒 6…改質触媒 11…触媒粒子 12…
多孔体 13…燃焼触媒粒子 14…改質触媒粒子 1
7…分離体 24…流体の流れの方向を示す矢印 2
5, 26, 27, 28…孔 30, 42…改質器 3
1, 25…電解質板
32…燃料極 33…酸化剤極 34, 35…ガス流路
37…水素ガス選択性透過膜、水素イオン伝導膜 4
1…燃料タンク 43…改質燃料供給用の形状記憶合金
配管 44…触媒燃焼燃料供給用の形状記憶合金配管
45…燃料電池
46…形状記憶合金からなる配管 47…ヒータ 4
8, 80…配管 49…圧力センサ 51…シリコン基*

*板 52, 55…溝 53, 54…深溝
56, 58…触媒燃焼用基板 57…改質反応用基板
59, 60…シリコン基板 61…加熱用ガス入口 6
2…燃料ガス入口
63…加熱用ガス出口 64…水素含有ガス出口
65, 66…固定治具 67, 68…流体導入口 6
9, 70…流体排出口
71…容器 72, 73…マイクロバルブ 81…空気
供給配管
82, 102…断熱材 89…細溝 90…燃料補給溝
91…排気溝
92…補給孔 93…排気孔 94…通気口 101…
改質槽本体 103…外管 104…内管 105…改
質触媒 106…バーナー 107…燃焼交換器
108…燃料タンク 109…ポンプ 110…反応管
120, 121, 122, 123, 124…平板 12
6…水素イオン伝導性膜

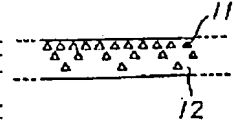
【図1】



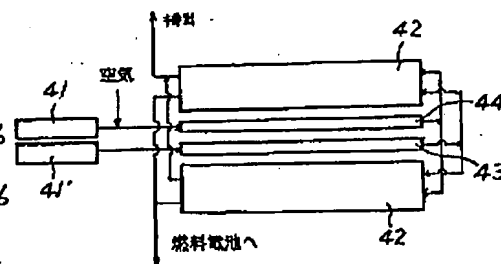
【図2】



【図3】



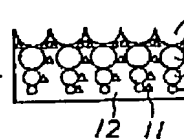
【図8】



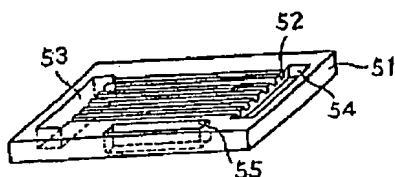
【図5】



【図6】



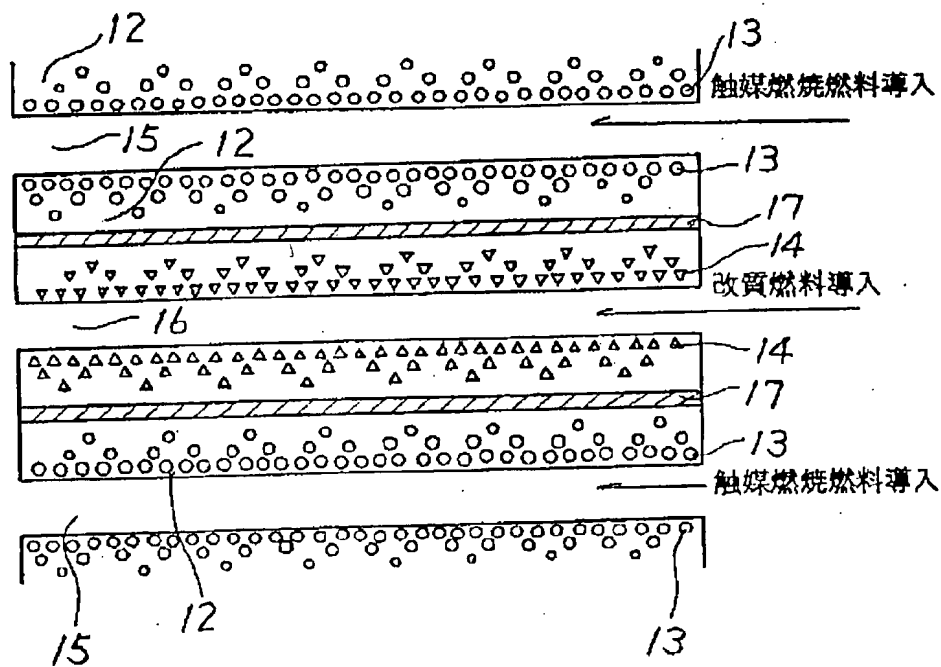
【図11】



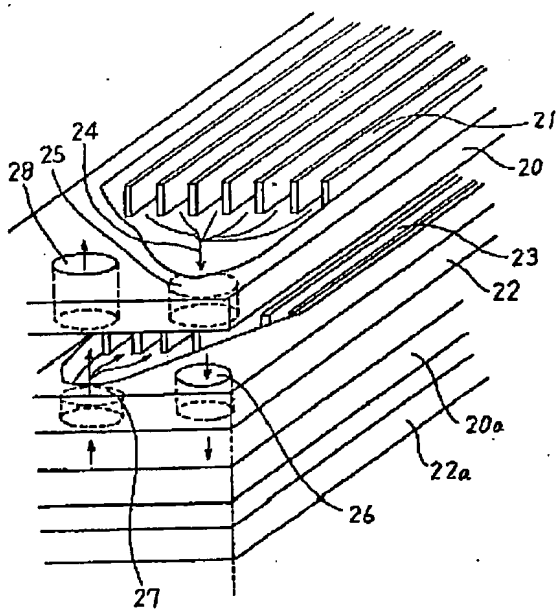
(12)

特開平6-111838

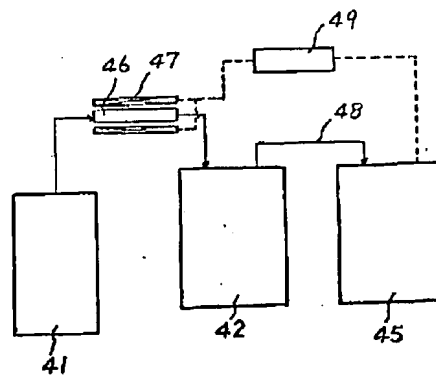
【図4】



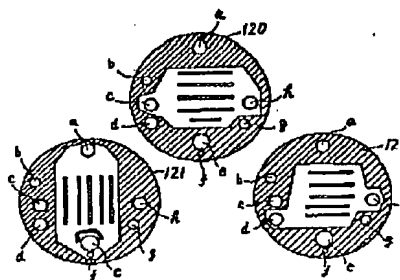
【図7】



【図9】



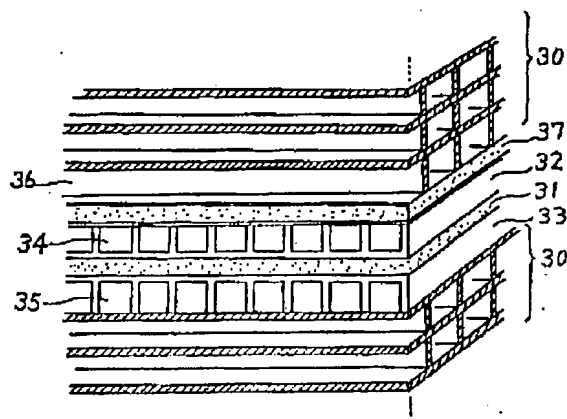
【図16】



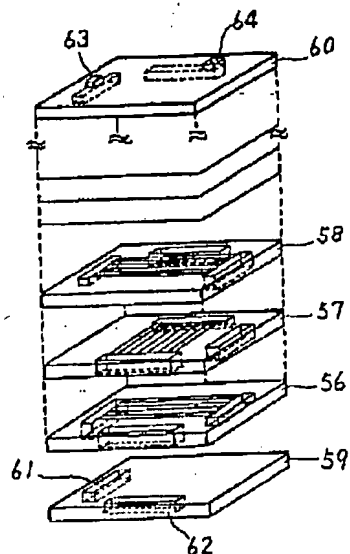
(13)

特開平6-111838

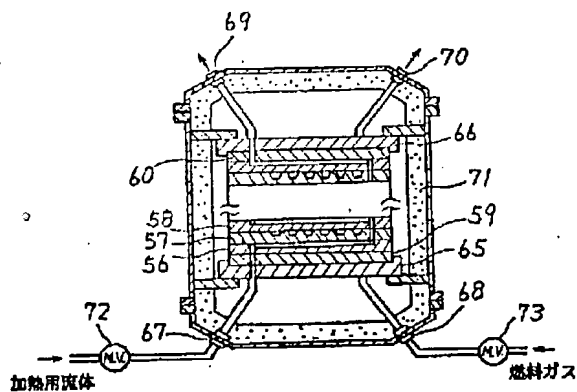
【図10】



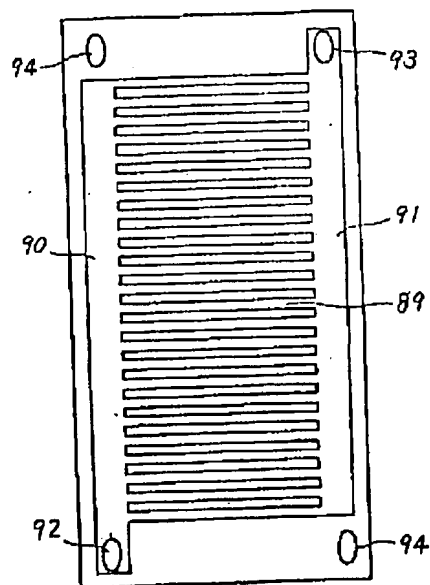
【図12】



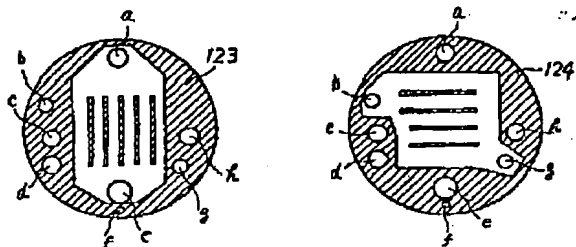
【図13】



【図14】



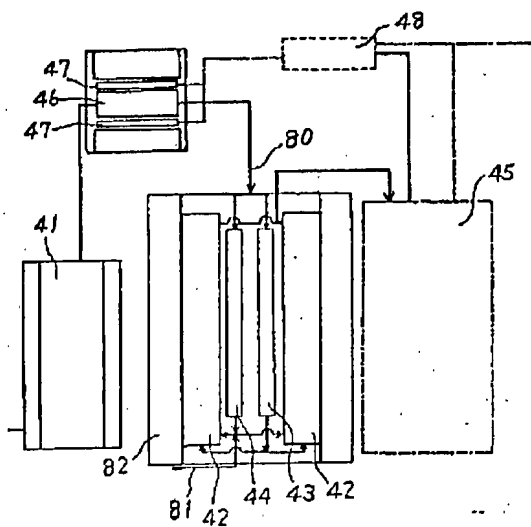
【図17】



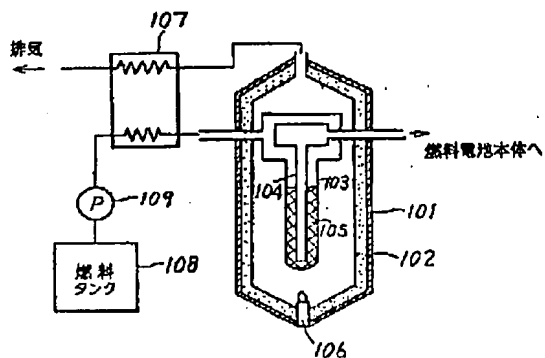
(14)

特開平 6-111838

【図 15】



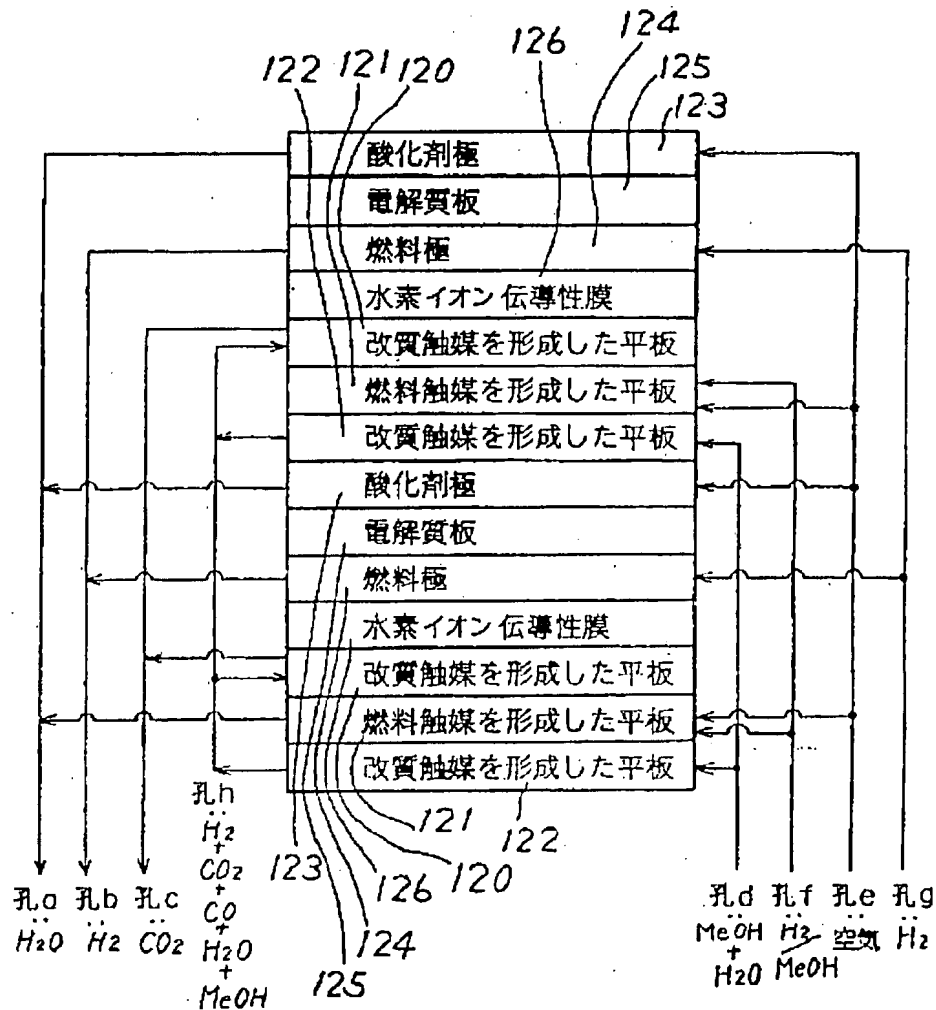
【図 19】



(15)

特開平6-111838

【図18】



フロントページの続き

(72)発明者 樽松 一彦
 神奈川県川崎市幸区小向東芝町1番地 株
 式会社東芝総合研究所内

(72)発明者 羽中田 佳男
 神奈川県川崎市幸区小向東芝町1番地 株
 式会社東芝総合研究所内